

# 人のつながり・ 安心の町づくり



# 備えあれば憂いなし

昨年は、集中豪雨、台風、地震といった自然災害が猛威をふるい、日本各地に大きな被害をもたらしました。海外に目を向けると、インドネシアのスマトラ島

沖で発生した地震による大津波は、インド洋沿岸国に未曾有の大惨事をもたらし、世界中の人々が自然の破壊力の凄まじさを感じていました。

私たちは常に自然の脅威にさらされています。そして災害はいつ、どんな形で来るのかわかりません。他人事ではなく、自分自身の問題

として災害を受けとめ、日ごろから防災を心がけて、自分たちの身近な周辺を点検し、身の回りにおける危険を少しでも取り除く工夫と準備が必要です。

「備えあれば憂いなし」という言葉がありますが、私たちにどのような心の備えが必要なのでしょうか。「人と人とのつながり」の視点で考えてみましょう。



お年寄りを救助するレスキュー隊員  
共同通信社提供

# 人の役に立ち喜び

東京近郊きんこうのK市で親の代から米穀店べいこくてんを営みながら、消防団活動に参加している池田さん（38歳）の体験です。



K市は近年、東京のベッドタウン化が進み、新しいマンションや住宅の建設が増え、多くの人がそうした新興住宅地に移り住んできました。一方で、昔から住んでいる人たちの地域もあり、いわば新しい町と古い町が道路を隔ててパッチワークのように組み合わせられているところです。

池田さんは消防団活動をしていて以前から気になることがありました。それは火災が発生したとき、消火されるまではどこも大慌てで大変なのですが、鎮火した後の住民の対応が各地域で大きく異なる


ることでした。

消防団は鎮火後の様子を見るために、現場に残ることがあります。そのとき、近所の人たちがおにぎりや飲み物などを出し合って、火災に遭った家族へ差し入れをしたり、お互いに協力し合いながら、一緒に後片付けをする地域があります。ところが、住民同士のつながりが薄い地域では、鎮火後も、特に目立った動きをしない場合も多々見受けられるのです。当然、そのような地域では火災が起こつても住民の安否を確認するのに手間取ることがあります。

池田さんは、そうしたことが気がかりだったのです。

ある夜、新興住宅地に隣接する倉庫で火災が発生し、池田さんはすぐに現場に





向かいました。建物はほぼ全焼してしまいましたが、幸い延焼はなく負傷者もありませんでした。

翌日、現場検証が終わった後、池田さんたち消防団員が特別に現場の後片付けも行いました。

その数日後、火災に遭った地域の町会長から消防団に御礼があり、次のような話がありました。

「私の町内の住民は東京に通勤している人がほとんどで、住民同士の交流があまりありません。消防団の活動に対しても消極的で、税金を払っているから消防団への協力を支払う必要がないといった意見が多数を占めていたんです。ところが、先日の火災のあと、消防団員のみならず、献身的に片付けをされている様

子を見ていた住民の一部から、〃もつと消防団に協力したい。自分たちにできることから貢献したい〃という意見が出てきました。住民の方々は本当に感謝されています」

池田さんはこの話を聞いてたいへん嬉しくなりました。

「私は地元で商売をしているので、その恩返しの意味を込めて消防団活動に参加しています。消防団へ誘われたときは少し躊躇したのも事実です。今でも消防団活動よりも自分や家族のために時間を使いたいと思うときもあります。しかし、このような言葉を聞くと、地域の人々に役立つことができるのが実感できます。本当に嬉しくなりますね」

池田さんはそう語ります。

# 助け合うことの大切さ

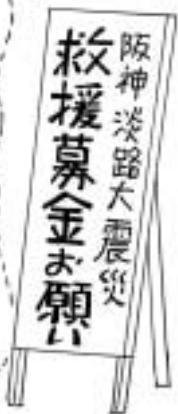


日本では、阪神・淡路大震災を契機にボランティア活動がたいへん活発になりました。活動に携わる多くの人たちは、充実感にあふれ、生き生きと輝いた表情で取り組んでいます。それは、ボランティア活動を通じて自分が誰かのために役立っているという実感を得ているからでしょう。その実感から生まれる喜びが、また新たな活動へのエネルギーとなっていくのです。

今から十年前の平成七年一月十七日に起こった阪神・淡路大震災は、六千四百三十三人もの貴重な命を瞬時に奪い、甚大な被害をもたらしました。被災地には全国各地から多くの人々が駆けつけ、さまざまなボランティア活動が行われました。そこでボランティアが果たした役割と貢献は極めて大きいものでした。

救援活動の一つとして、震災の翌日から、街頭で募金運動を行った一人の青年の感想文を紹介しましょう。

大地震のあくる日、友人の誰かが「救





援募金を百万円集めよう」と言い出した。わずか十数名ではとうてい無理な目標だと思っただが、とにかくテレビに映った大惨事はとても他人事とは思えなかった。

さっそく大きな看板を作り、その日の夕方、駅の構内に立った。みんな何を言っていたのか分からなかったが、とにかく救援を訴えた。その日五万円が集まった。次の日も早朝駅で訴えた。十万円集まった。

次の日、スーパーの前に立った。顔見知りの人たちがいっぱい寄付してくれた。「ひよっとしたら目標達成できるので」と自信がわいてきた。みんな仕事があるので、手分けして時間をつくった。こうして十五回目には、ついに百万円を突破したのである。

「寒いでしょう」と、カイロを買ってき  
てくれたオバチャン。さりげなくのど飴あめ  
を置いていつてくれた女の子。昼間は忙  
しくて協力できないので、早朝一人で駅  
前に立ってくれた友人。車を止めて走っ  
てきて募金をしてくれた外国の人。てれ  
くさそうに小銭をいっぱい入れてくれた  
ツツパリのお兄ちゃん。いつしよに大声  
を出して協力してくれた元気の良いパチ  
ンコ屋の兄ちゃん。被災した若い女性が  
偶然に通りがかり、「私たちのためにあり  
がとう」と、涙とともに入れてくれた百  
円玉。

わずかな救援募金活動の時間の中にも  
こんなに嬉しいことがありました。

人の役に立つということは、自分の喜



びだけでなく、人とのつながりの大切さ  
を実感する体験でもあります。

大震災は私たちに大きな悲しみを与え  
ました。しかし、その一方で、人の心の  
温かさや人と人とのつながりを通して、  
助け合って生きていくことのすばらしさ、  
そして尊さをあらためて私たちに気づか  
せてくれたと言えるでしょう。



# つながりは日ごろの 人間関係から生まれる

阪神・淡路大震災で家屋が倒壊し、閉

じ込められて身動きができなかった人たちの多くは、隣近所の付き合いにもとづ



く情報で命を救われました。

平成十五年版『防災白書』によると、救助された約三万五千人のうち、約二万七千人が近隣住民によって救出されたと報告されています。大災害では外部からの救援をすぐに受けられません。最も頼りになるのは、隣近所の人々です。まさに人と人とのつながりがいざというときに大きな威力を発揮するということが、この白書から分かります。

このようなつながりは、災害が起こってから生まれるものでなく、地域に住む

人々の日ごろのふれあいによつて築かれ、  
培つちかわれていくものです。これは何も難し  
いことではありません。町角まちかどでご近所の  
人と出会つたら、「おはようございます」  
「こんにちは」「いかがお過ごしですか」  
という声をお互いがかけ合うことなど、  
基本的な人間関係から始まります。

災害時には、同じ地域に住む人々のつ

## 「おんぶ作戦」隊

災害に強い町づくりは多くの自治体で  
進められています。その一例として東京  
都荒川区があります。

この区では、「おんぶ作戦」と呼ばれる  
避難援助体制を推進しています。これは

ながりが威力いりよくを發揮するということが知  
られると、全国各地で自主防災組織を作  
る動きが活発になりました。同じ地域に  
住む人々が、定期的な訓練によつて防災  
技術や知識を身につけ、いざというとき  
の役割分担や連携れんけい方法などを決めておく  
のです。これは、災害に強い町づくり、  
つまり地域防災力ちいきぼうさいりよくを強化するためです。



非常時じりき、自力で避難することが困難な高  
齢者れいしゃや体が不自由な人をおんぶしてでも  
救出するといふ趣旨しゆしから名付けられ、区



内にある百十数の町会の半数近くで、「おんぶ作戦」隊が組織されています。

その中の一つ、東尾久四丁目上町会では、「わが町は、わが手で守る」という理念のもと、「倒壊家屋救出隊」「おんぶ作戦隊」「消火隊」「予備隊」（町会内の養護老人ホームから要請を受けて救出に向かう隊）で構成される区民レスキュー隊が二十七名の地元住民によって結成されています。この町会では、都と区の総合防災訓練や他の町会との合同訓練だけでなく、町会独自の訓練を隔月ごとに週末や夜間に行っています。

平成七年に初めて実際の訓練を行い、お年寄りをおんぶして安全なところに移しました。訓練を重ねるごとに、区民レスキュー隊の熟練度が向上していき、そ

れに伴<sup>ともな</sup>って町内の人々の隊を見る目が変わってきました。訓練を見学に来る人、町で隊員に激励の言葉をかけてくれる人などが増え、区民レスキュー隊の訓練を通じて、町内に住む人々のつながりが深まっていきました。また、区民レスキュー隊がマスコミ等に紹介されて、それが隊員の励<sup>はげ</sup>みになり、町会の誇<sup>ほこ</sup>りになっ<sup>な</sup>っています。

東尾久四丁目上町の会長であり、町会の防災本部長の石山光雄<sup>いしやまみつお</sup>さん（81歳）は、「うちは素人<sup>しろうと</sup>の集まりで、消防や自衛隊<sup>じえいたい</sup>のプロみたいにはできないけれど、まず自分たちの町を守る<sup>まも</sup>ることに徹<sup>てつ</sup>しています。特にお年寄りから、いざというとき、とても心強い」という声<sup>こゑ</sup>が聞かれ、喜ばれています」と語ります。



# 安心して暮らせる 町をめざして



同町会では、区民レスキュー隊の訓練だけでなく、日ごろから高齢者が安心して暮らせるように努めています。約三百五十世帯が住む町会には一人暮らしの高齢者も多く、そのような方のために、本人了解のもとで両隣に住む人が見守り役と非常時の通報役を務めています。

「プライバシーの問題があるので、独居老人の住居を把握することは難しいと言われていますが、ここは今でも昔ながらの下町の人間関係があるから、お年寄りがどこに住んでいるのかをすべて把握しています」と石山さん。

さらに、町内の各戸一軒一軒には「地震に対する心構え」と題したはり紙が配られています。その紙には、町会長の石山さんと区民レスキュー隊の隊長の電話番号も載っていて、「緊急のときには電話してください」と書かれています。

石山さんは一人暮らしのお年寄りを乗せた救急車で一緒に病院に行くこともあり、運ばれた方から「身内が来るまでしばらく一緒にいてください」と頼まれることもよくあるそうです。このような関係を築くには、やはりふだんから町内のお年寄りに、「お元気ですか。いかがお過



「ごしですか」という声をかけることがい  
ちばん大切だそうです。

一方で、区民レスキュー隊のメンバ―  
も高齢化していくので、若い人に入って

もらわなければなりません。そこで、石  
山さんが町内の新築の一戸建てや新築マ  
ンションに移り住んできた人を区民レス  
キュー隊に「スカウト」します。新しく  
移り住んできた人たちは、三十、四十代  
の人が多く、石山さんが母親たちからの  
子育ての相談に乗るなどして人間関係を  
つくり、その夫を説得することです。

また、区民レスキュー隊の活動は、災  
害時だけでなく地域の子どもを見守るこ  
とや日ごろの防犯にも威力を発揮し、  
人々が安心して暮らせる地域づくりにつ  
ながっています。

「災害時に住民の命を守れるかどうかは、  
地域の人たちが日ごろからお互いに顔の  
見える関係を築いているかがカギなので  
す」と石山さんは話します。

# 温かいふれあいのある町づくり

このような町会の活動を見ると、災害に強い町づくりは同時に、人々が安心して暮らせる、心の通い合う温かいふれあいのある町づくりを行うことでもあると気づかされます。

私たちは、誰もが社会の中で多くの人とのつながりの中で生きています。この世に生を享けた瞬間から、親・祖先とのつながり、家族とのつながり、さらに学校、職場、地域社会とのつながりの中で暮らし、多くの人々とかかわりながら成長していきます。災害が起きて、そのつながりの大切さを知るのでは遅すぎます。

災害に対する備えはラ



インフラインの強化など、ハード面でも大切なことは言うまでもありませんが、人々がふれあい、心の通い合う温かい社会が、災害時においても大きな力を発揮することをあらためて考え直して見る必要があるでしょう。

私たちは、一人ひとりが多くのつながりを実感し、ふだんから助け合って暮らしている心温かい町づくりをめざしたいものです。

その具体的な実行の第一歩として、ご近所の方々との明るい挨拶の輪が広がっていけばどんなにすばらしいことでしょうか。

